＜台南芸術大学交換留学体験記 第三号　2022 年 10 月＞

三宅志佳

一か月も経つと日用品も揃い、新しい環境にも慣れてきた。生活はとても快適だった。寮は平和で盗難が発生することもなく、盗難注意のポスターさえ無い。課題は多いが、その他には追われることも無くのびのびした気持ちで過ごしていた。

授業はどの時間帯でも遅刻してくる人が数人居るが、あまり気に留められない。教室の雰囲気はリラックスしていて、先生が制作方法を実演している最中堂々と棒付き飴を舐めている人が居たし、座学の時にこっそりリンゴを丸かじりしている人も見つけた。とはいえカリキュラムは全く緩くはなく、セラミックや金工を選んでいる生徒は県大の工芸工業より忙しいだろう。実技で基礎系のものはほとんど毎週新しい課題が追加される。私が取った授業も思っていたより忙しく、「大変な授業が多いね」と言っていた同級生の言葉は本当だった。

周りが夜型なので、気をつけていないとどんどん夜型の生活になってしまう。休日を除き工房は施錠されないため、課題が忙しい時は皆夜遅くまで残って作業している。夕方６時に始まり夜９時に終了する授業もあり、そのままぶっ通しで深夜１時くらいまで作業する人もいる。先生の説明が聞き取れず課題のやり方を人に教えてもらう場合には、相手の時間に合わせるため必然的に作業が夜中になることもあった。寮が学校の敷地内にある上、門限やシャワーの時間制限が無いのでいつ帰っても問題ない。とはいえ朝はシャワーのお湯が出ない。ほとんどの授業が朝 10 時以降に始まるので早起きする人は少ない。土日の午前中は皆寝ているので寮はとても静かだ。

校内に自分以外の日本人ほとんどおらず、中国語の習得にはもってこいの環境だった。発音を知っている単語はほぼ聞き取れるようになり、来た時より会話がちょっとだけスムーズになった。台湾に来る前に使っていた問題集を久しぶりに開いてリスニング問題をやってみたところ、正答率が倍になっていた。交換留学生というゲスト的な立場は会話の機会も増やしてくれたように思う。ある言語の初心者にとって、１対１や１対大勢の状態で人から関心を向けられ、拙くてもその言語で会話を続けてもらえるのはとても良い学習機会だ。当時はその貴重さに気付いていなかった。後に日本人が多く居る大学の日本人留学生や仕事で日本に住んでいる台湾人と話をする中で、自分の環境はとても恵まれていたことを知った。

10 月は、友達が建国記念日の花火大会を見に嘉儀まで連れて行ってくれたり、台北の同志遊行を見に行ったりした。

左：花火大会、花火の隣でドローンショーが同時に行われていた。恐ろしい人混みだった。
真ん中：同じく花火大会、屋台で売られていた光る長い触角カチューシャが印象的
右：同志遊行、雨が降っていて移動が少し大変だった。Wonder というバーでのアフターパーティーが最高に楽しかった。